

奴隸

中学校 P N 加藤 ユナ

私の朝ご飯はバナナ一本とミニトマト五個、それに炭酸水と決まっている。

炭酸水を飲むのは胃に空気を入れて、少しでも空腹を紛らわすためだ。本当は学校にも持っていきたいのだけれど、我慢して、家では水代わりに四六時中飲んでた。

給食もできるだけ減らすようにして、牛乳は抜いた。夜ご飯も、サラダと春雨のスープ、ゆで卵一個だけと決めた。

このメニューを三か月続けて、私は七キロも痩せた。

「三奈^{みな}、最近なんかスタイル良くなったよね。」

ある日友達に言われて、私は痩せることの素晴らしさに気づいた。

もっと痩せたい。細くなりたい。

その思いは日に日に強くなった。

毎朝、体重計にのって今の自分の体重を確認してから、私の一日は始まる。

朝から大量の炭酸水を飲み、空腹を感じてもすぐに炭酸水を胃に流し込む。どうしても食欲が抑えきれなくなったときは、塾の自習室へ行き、食べられない環境に自分を置くことで何とか自制心を保っていた。

両親には、ちゃんとご飯を食べなさいと口うるさく言われていたが、今さらダイエットをやめるなんてできなかった。

私はもはや、痩せることに中毒になっていた。暇さえあれば体重計にのったし、全身鏡で体型を確認した。気づけば、最近は母の作る料理を全く食べていなかった。

でもそれはもう私の中で当たり前のことになっていて、食べないことが私の通常だった。

細ければ細いほどいい。スリムな体型こそが正義。

痩せることは、ほとんど私の生きがいだった。

細くなったから私は自分に自信がついたし、性格も前より明るくなったと思う。体重計のメモリが減っていくだけで、日頃は感じられない大きな達成感や、もっと痩せたいという向上心、また自分の可能性にも気づけた気がした。

食べられないのはつらい。でも、我慢すれば我慢した分だけ、体重は減る。その落ちた分の体重は、確かに、私の努力の成果なのだ。

そんな、私がダイエットに夢中になっていた頃のことだった。

「この薬、すごくダイエットにいいよ。食欲めっちゃ抑えられる。」

ダイエット中の友達から、「Beスリム」という薬を紹介された。

Beスリムは、体重が落ちにくくなる中高年の人を対象にして作られた食欲抑制剤で、調べると薬局で普通に売られていた。

その友達によると、Beスリムを飲み始めてから二週間で四キロも痩せたらしい。しかし、十八歳未満は使用禁止、らしかった。でも、

「少しぐらいなら大丈夫だって。目標体重まで絞れたらやめればいいし。」

その友達は全然気にしていないようで、「副作用とかも全くない」と言い切っていた。

これは、私にとってはあまりにも魅力的だった。Beスリムを飲めば、空腹に耐えなくてもよくなるのかもしれない。炭酸水だけしか摂取しない生活も可能になるのだろうか。そうしたらもっと劇的に痩せられるんじゃないか。

それは欲望だった。……抗えなかった。

私は一週間に一錠だけという決まりで、Beスリムを服用するようになった。

Beスリムの効き目は想像以上だった。友達が言っていたように、食欲が消えた。炭酸水を飲まなくても、お腹が空く感じがない。一日中何も食べなくても平気になり、体重ものの三日で二キロ落ちた。

それからは、この薬は私にとって麻薬になった。一週間に一錠だったのが説明書通りの二日に一錠に変わり、お小遣いはほとんどBeスリムに充てるようになった。

その頃には、もう全く食べられなくなっていた。食べ物を見るのも嫌になっていたし、Beスリムの効果で食べたくなかった。体重は目に見えてどんどん落ちた。私にはそれが快感だった。

食欲がなくなっていくにつれ、私は給食も全然食べられなくなってしまった。事前に量を減らすのだが、それでも食べることができずほとんど残してしまう。

申し訳ないし、もったいないという気持ちもあったが、どうしようもなかった。

ある日、罪悪感を感じながら、いつものように食べきれなかったギョーザと中華スープを残飯入れに残していると、

「土田さん^{つちだ}って少食だね。毎日全然食べてないよね。」

そのとき給食当番で配膳台の片づけをしていた東^{あずま}さんが、不思議そうな顔で私を見ていた。

「そんなに食べなくてお腹減らない？」

東さんは背が高く、靴のサイズも大きくて、体格がいい。どちらかというと少しぼちやりしている。

「うん、あんまり……。」

「へえー、土田さん痩せてるもんね。」

それだけ言うと、東さんはトングを片付けに行ってしまった。

私は何だか、給食を残していることを責められているような気がして思わず俯いた。でも、食欲がないから食べられない。どうしても食べ物が口に入らないのだ。咀嚼する

のも不快に感じてしまう。

私は雑巾で配膳台を拭いている東さんを見た。東さんは出されたものは全部、きちんと食べているんだろうな。東さんはちゃんと、「いただきます」と「ごちそうさま」を言う価値のある食事をしている。食べることをとんでもないことだと思ってきた私とは全然違う……。

そのとき、私には東さんや給食を食べているクラスメイト達のが、なぜだか神聖なもののように見えた。反対に、私たちに食べてもらうために食べ物になってくれた生き物たちを残飯にして、体型の美しさにばかり固執している自分がとても卑しく思えた。でも、それでも、私は痩せたいのだ。

苦しさに胸の奥をほじくられるようだった。

そそくさと、私は残飯を捨てた。